

拙者來年在國可致と仰せ越されけるに、利長卿の御返事に、左候はゞ、我等事國も近く候間先づ罷下り、來春追付可罷登と仰せ遣さる。御勝手次第との事にて、利長卿八月廿八日に大阪を立ちて下國し給ひ、金澤に十日許逗留し、富山へ御越被成、御放鷹にて御遊行の處、冬に成り家康公より使者來り、緩々と御休息たるべく、上方無事の旨仰せ越さる。備前中納言秀家卿よりも同時に使者來り、同じ旨の趣にて、則ち使者共近江路へ歸り至りけるかと思ふ頃、利長卿婦負郡へ鷹野に出で給ふ處へ、備前中納言殿より兩使早馬にて來る。則ち御對面、委細は書中に申し上げる由にて、狀箱上る。御披見被成、御機嫌悪敷、早々御歸り被成、其の夜富山に在り合ひける人持分登城し御談合ありて、翌日早々金澤へ被爲入、金澤の人持分不殘登城にて御談合也。其の趣意は、内府公伏見より大阪へ御越被成、芳春院殿並に利長卿御内室を人質に取り番を付けたりと、秀家よりの注進也。人持分の内誰共名は云ひ傳へず、急に御上洛有つて内府と有無の御一戰可然と云ふ。残りは皆人質を捨つる事は、成るまじきとの儀に一決して、横山

大膳を以て様子御聞可被成との儀に極り被指登。大膳大阪に至りて理を盡す處、種々難題を被仰立埒かず。大膳下國して上方の様子申上げ、又大阪へ登る事三度目に無事に成りたり。慶長五年の春也。利長卿の内室は加州へ下り給ひ、芳春院殿は江戸へ人質として、村井豊後守御供にて下り給ふ。其の出入の頃金澤惣構を掘らせ給ふ也。同書朱書に云ふ。慶長四年の冬十二月に、惣構侍普請にて出來。今の内物構と云ふ是也とあり。青地禮幹の本藩譜略に云ふ。慶長四年己亥閏三月三日、高德公薨於大阪城邸内。公將薨之時、命小君高島氏。手書遺誡十有一條。以貽世子利長云々。公嗣立。牧賀越二州。能州同母利政牧焉。八月廿八日歸藩至金澤城。今茲冬十月訛言公謀叛。東照君將討之。及使横山長知說焉得解云々。と載せたり。村井長明の象賢紀略に云ふ。大納言様御逝去一七日過候て、肥前守様大阪より伏見内府公へ御城移を御見廻り、治部少を澤山へ追はらひ被遣候。其年七月初め比、津の國へ利長様御鷹野に御越候て、あかしまで御越被成候。八月肥前様加州・越中へ御鷹野に御下被成候。はや々大納言様御遺言御違へ候。御

運のすゑかと村井豊後、奥村伊豫守など笑止がり申候。あんの如く金澤へ利長様御下跡に、内府公大阪西丸へ俄に伏見より御はいり候て、其の時奥村伊豫は大阪に芳春院様へ付て居被申、村井豊後は伏見御たやに萬事申付候て有之。其の時豊後儀、家康公之人數にまぎれ物に成候て、大阪へかけ入。芳春院様御泪をながされ、大納言様に此通見せ申度と豊後に御意候て、忝申申候。其時より方々より利長様へ注進御座候へば、扱利長様と内府公と御中あしく色々さまゝの事。上方より横山大膳・有賀ゆふかを御上せ候へよし、扱ひ心に大谷刑部少より申越、明三月上り被申。扱昔利長様に有之多野村三郎四郎、其頃はせうすいじと申、京にひきこみ有之候。是は太田但馬守と縁者にて候。其ものを下候て、色々之儀候てあつかひ濟、扱芳春院様江戸へ御人質に御下りに相極申候事とあり。是其の時世の情實をありのまゝ記載せしもの也。白石紳書にも、此の時の事を載せたり。按ずるに、貞享二年卯辰妙泰寺由來書に、枯木町に寺有之處、大聖寺陣之翌年御城下惣構堀御普請に付被召上と見え、愛宕明王院、卯辰觀音院、久保市法住坊な

どの由來書などにも、慶長六年卯辰山へ移轉被命由と記載し。三州志にも、久保市乙劍神社往古より新町に鎮座の處、慶長六年七月別當金剛寺等七ヶ寺一紙連名にて、卯辰山へ移轉を命ぜられたるよし見ねたり。右妙泰寺由來書等に據れば、内惣構堀を穿たしめられし事慶長六年の如く聞ゆれど、右惣構堀出來に付きて六年に至り堀内の寺院をば卯辰山へ移轉を命ぜられしものにて、妙泰寺の由來書も其の由なるべし。外惣堀を穿ちたるは、慶長十五年にて内惣構堀より十三年後なりけり。

○金谷出丸地

舊藩中は今尾山神社の地をば金谷と呼べり。金谷はかなやと稱し、昔は金屋と書けり。元此の地の町名にて昌披問答にも、昔は金屋町とて金谷門の内有之町之由承り及ぶとあり。或は云ふ。此の地に南町を今の地へ追ひ出し、金屋町は淺野川橋外へ移され、跡地は出丸となし、城郭内へ取り込み給へりといへり。慶長の金澤城圖を考ふるに、玉泉院丸の地に近藤大和・上坂又兵衛居住し、松原屋敷の地に葛卷隼人の居邸ありて、其の下邊なる内惣構堀の内に三條